むのたけじさん死去

ジャーナリスト 101歳「戦争絶滅」訴え

故郷の秋田県横手市で講演するむのたけじさん＝2015年10月13日

「戦争絶滅」を訴え続けたジャーナリストむのたけじ（本名・武野武治）さんが21日、老衰のため、さいたま市の次男宅で死去した。101歳だった。葬儀は近親者のみで行い、後日、「しのぶ会」を開く。

▼6面＝社説

朝日新聞記者時代に終戦を迎え、「負け戦を勝ち戦のように報じて国民を裏切ったけじめをつける」と終戦の日に退社した。ふるさとの秋田県に戻り、横手市で週刊新聞「たいまつ」を創刊。1978年に780号で休刊してからは、著作や講演活動を通じて平和への信念を貫き通した。

100歳になった昨年は戦後70年で「歴史の引き継ぎのタイムリミット」といい、講演で各地を飛び回った。今年5月3日に東京都江東区で行われた憲法集会で「日本国憲法があったおかげで戦後71年間、日本人は1人も戦死せず、相手も戦死させなかった」と語ったのが、公の場での最後の訴えとなった。

（木瀬公二）

「思い受け継ぐ」「平和へ気迫伝わった」

知人ら悼む

むのさんと親交の深かった人たちは、突然の訃報に驚きつつ、遺志を継いでいく決意を新たにした。

作家の落合恵子さん(71)は主宰する子どもの本専門店で何度か講演してもらった。「反戦・反核・反差別について、力強く訴えてきた大きな存在。あの終戦から負った責任を果たすことをミッションとして、100歳を超えてからも活動を続けてこられた」

「奇跡は望むものではない。ほしいと望むものを自分たちが自らつくるものだ」という言葉が心に残っているという。「しっかりと受け継いでいきたい」

今年の憲法記念日に、集会のゲストスピーカーにむのさんを呼んだのは、ルポライターの鎌田慧さん(78)。車いす姿のむのさんは、マイクを握ると興奮し、右手をぐるぐる回し始めた。「平和への気迫が伝わってきた。最後までジャーナリストを貫いた人だった」

弱者の立場 常に心がけ

むのさんは、終戦の日の8月15日を特別な日と考えていなかった。「365日の生活の中で考え続けないといけない」。その日行われる黙祷にも反対で、「声を張り上げよう」と訴えた。

新聞記者時代は中国やインドネシアなどに従軍。普通の人々が、相手を殺さないと殺される現場を取材し続けた。

終戦直前、3歳の長女が疫痢で死去。助けられなかったことが、反戦活動を続ける原動力になった。徹底して憲法改正反対を訴える一方、「憲法を変えようとする人と、変えまいとする人がいるのが普通で、それが正常なんだ」とも言い、改正派の意見にも耳を傾けた。

ジャーナリストである根底には、幼い頃に見た懸命に働いても貧しかった実家と、何もせずに豊かに暮らす旦那衆の姿があった。「不当に貧しい者がなぜ存在するのか。不当に富んでいる者がなぜ威張り続けるのか」。常に弱者の立場に立った発言を続けた。（木瀬公二）